

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 塔望遠鏡のお披露目を行って “日江井名誉教授からの便り”

アーカイブ室新聞 345号に「塔望遠鏡の台内へのお披露目」という記事を書き、現在の塔望遠鏡の様子を写した写真もたくさん掲載した。このお披露目には90人もの方が来てくださった。この人数は予想外に多かった。勤務時間終了後ということで、帰宅を急ぐ人たちには無理な時間帯を設定してしまった。塔望遠鏡に入れるような整備が一応できたお祝いを兼ねていたからである。来ていただいた中には、この塔望遠鏡を使って研究をされた日江井栄二郎名誉教授、平山淳名誉教授も駆け付けてくださった。そして日江井さんからは次のような「印象記」をいただいた。

この「印象記」は、多くのことを示唆していると思うので全文を掲載させていただく了承をもらった。これからの若者たちの研究の糧としていただければ幸いである。(内の*以下は筆者の註)

アインシュタイン塔望遠鏡お披露目 2010. 6. 4

ビール、ワインは渡部潤一氏の私財のお蔭で皆で飲み談笑を楽しめた。有り難う。

世の中を眼に見えるものと見えないものとに分けると、宇宙は4%しか見えなくて、残りの96%は見えない。これほど多量のものが宇宙を支配している。眼の前に見た時に、その奥にある見えないものをどれ位良くみるかが大切である。その大切さを後世に伝えようとして、中桐君は粉骨砕身の努力でアーカイブの仕事をしている。今眼の前にある塔望遠鏡の建物や地下室から何を見透すか、若い人は、ここはアングラなので、酒を飲むのに良い場所だと感ずる人もいるでしょう。しかし、80有余年の歴史を持つこの望遠鏡は実は日本の分光学的研究の発祥の地である。中桐さんの説明にもあったように、この分光器を世界に冠たる望遠鏡にしたのは末元さん(*東京天文台第10代台長)であり、この高分散の分光器の経験を生かして、岡山の望遠鏡で分光観測が行われ、さらにそれが「すばる」望遠鏡にも引き継がれている。青木君(*ハワイ観測所 HDS を使った高分散分光若手研究者)が提案しているように、高分散の考えの根本はここにある。また磁場は、海野さん(*元東京天文台、東京大学天文学教室、東京大学名誉教授)が始めたが、牧田君(*塔望遠鏡を使った太陽物理学者、京都大学教授に転出)に引き継がれ、岡山の太陽望遠鏡(65cmクーデ型太陽望遠鏡)で磁場観測が行われ、それがその後のフレア望遠鏡や「ひので」衛星における磁場観測に引き継がれた。

この装置の機械部分については、中村儀一さん(*三鷹光器会長で元天文台職員)が見えないものを見ていると思う。ツァイスの会社では、図面を皆に見せていると聞く。そん

なことをするとまねをされるのではないかという見学者に対して、ツァイスの技術者は、造ってくれて結構です。しかし、その機器が精度良く性能を発揮できるように造るのには、図面にかけない「魂」が大切であるという意味の返答をしたと聞く。眼に見えない「何か」が大切である。中村さんはこの歯車のこのように上手く作られていると話してくれる。彼は見えないツァイス魂が分かったのであろう。

アインシュタイン塔望遠鏡は彼の相対論を検証しようという大きな夢に実現のために造られたが、その結果検証はできなかったけれども、高分散の分光器のお蔭で吸収線、輝線のプロファイルを調べることが出来て、その結果素晴らしい観測が出来た。大きな夢は大切です。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp